

ロンドンの現代都市景観

—新旧混在する街並みの発展とその魅力に関する考察—

勝部さおり（法学部政治学科3年）

指導教員：伊藤行雄教授

ロンドンには他の多くのヨーロッパ都市と同様、長い歴史をもつ都市であり、その中で生まれた各時代の痕跡は、街の至る所にしっかりと残されている。しかし、古い街並みのまま整然と統一されているパリのような都市とは異なり、ロンドンではそれらの歴史的痕跡は、近現代の建築と混ざり合い、新旧混在の様相を呈している。他のヨーロッパの歴史的な都市(パリなど)と異なる現代のロンドンの街並みは、どうして生まれたのか。本論ではその要因をさぐるために都市構造の歴史と都市美の思想を考察した。

まず、都市構造の歴史的見地から見ると、大地主たちの手によって街が部分ごとに発展してきたロンドンでは、「自治の精神」が強かったことが挙げられる。この「自治の精神」は、有名なロンドン大火で街のほとんどが焼けてしまった後に提案された壮麗な都市計画とは相容れないものであったし、計画に従って大きな道を真っすぐ通すことも実現できなかった。土地の部分ごとの断片的な都市開発が主流だったことが、ロンドンに自由な建築が展開される土台をつくるきっかけとなった。

次に、イギリスにおける都市美の思想は「ピクチャレスク」であった。それは歩く人の視点で、次々と現れる風景を楽しむ精神であり、画一性や味気なさを嫌う思想であった。味気ない「条例住宅地」が生まれる度に「アメニティ」という評価軸を設けることでピクチャレスクな街並みを取り戻そうとする試みはあった。しかし「美的な」基準を一貫してコントロールすることへの矛盾が顕在化し、その試みは失敗した。その結果、都市における美を託されたのは建築家たちであった。モダニズム建築への反抗としてロンドンで発達した先駆的な思想は、こうして様々な建築家の多様性を受け入れる土台が整ったロンドンの街に、超モダンな建築となって現れたのである。

新旧混在の様相はこうした歴史と文化に裏打ちされて成立したものと考えられる。つまり、それぞれの建築や街並みを独自に発展させていく地主や行政の姿勢が維持されることでロンドンの現代景観が形成されたと言えるのではないかと考えられる。これがこの都市に根付いた特色であり、また魅力でもあると考えられる。